

コメント2

ウスビ・サコ

京都精華大学人文学部長・教授

私はマリ共和国の出身で、ブラジルとはそれほど縁がなく、行ったこともありません。また私の専門は建築で、身体もダンスも直接には関係ないのです。ただし、建築のなかでも人の行動や関係性、空間と人との関係を研究対象にしている、人や文化そのものに、個人的に関心があるので、その方面で話ができたと思っています。

アフリカではブラジル生まれのサブ・カルチャーとして認識されているカポエイラ

カポエイラの起源などについてコメントをしてほしいと言われたとき、まずはインターネットなどで探ってみました。じつはアフリカの視点からカポエイラを見ることは、あまりありません。今日のみなさんの話では「アフロ・ブラジリアン」とか「アフリカ原産である」という話はありませんでしたが、アフリカでのカポエイラの認識は、じつは低いのです。これについては複雑なものが見方があるかと思われます。

先ほどカポエイラの起源の話がありました。じつはこれについてアフリカの解釈から言うと、言葉は悪いですが、カポエイラはブラジル生まれの一つのサブカルチャーだという見方をすることもあるのです。

というのは、先ほどアフリカからブラジルに奴隷が連れて行かれたという話がありました。じつは奴隷たちを連れて行くと、同じ文化や民族の人たちを集めるのではなく、できるだけバラバラにして、いろいろなグループを混ぜていたのです。ですから、そこから生まれてくる文化がどこを軸として生まれたのかについては、探るのが難しいわけです。

講演でも話が出ましたが、コンゴやアンゴラあたりの昔の戦士たちのトレーニングにあった動きに、カポエイラが似ているという解釈もなくはありません。しかし当然ながら、ブラジルで独特の変化を遂げています。自分たちのアイデンティティを持たなくてはいけない一方で、その動き自体が支配者たちから戦力とし

て見られないようにダンス風に見せたりしてきたことが、カポエイラの背景にあると言われます。

現在のブラジルのカポエイラにみえる植民地支配による影響

先ほど宇野先生からマイノリティ哲学という話がありました。私はもう一つ、ポストコロニアル的なものの見方もあるのではないかと思います。

マルティニーク出身で、ネグリチュードという黒人解放運動、もしくは黒人固有の文化を高揚する運動をしたフランツ・ファノンという人がいます。その人の話で印象に残っているのが、「アリエネーション(alienation)」、フランス語で言うと「アリエナシオン(疎外)」ということです。じつは植民地主義のなかで支配されている人は、支配する人にどうしても似ようとする心理が働くところがあるのです。

いまアフリカの立場からカポエイラなどを見ると、「極めている」ところがあります。純粋な儀式でもダンスでもなく、どちらかというと西洋風味のアフリカ文化ではないかと思えるところがある。これは彼らがわざとそうしているのではなく、ある種の心理的な効果で、支配されればされるほど、支配者に向けてのどこか「いやみな憧れ」が出てくる。自分もその立場に立てば強くなると考えるのです。

その結果、アフリカ出身の黒人文化全体から見ると、反抗的な文化、どちらかというと抵抗するようなものが出てきたりする。これは私のアフリカ的な視点から見ると、ポストコロニアル的な現象のなかで出てくる話かなと思います。

「極めて」ものとして逆輸入されるアフリカ起源の文化

もう一つ、先ほどの講演で、「カポエイラがアフリカに逆輸入しはじめた」という話がありました。それは確かだと思います。じつはアフリカのポピュラー音楽





資料4-1 マダガスカルやレユニオン島のモラング

は、キューバ音楽をベースにしている部分が多いのです。キューバの人たちに聞くと、「我々はアフリカのリズムに乗ってやっています」と言います。しかし我々アフリカではキューバのリズムに乗って音楽を作っているのが現状で、当然ながらその逆輸入の過程では、我々はそのキューバのリズムは「極めた」もの、もう少し進んだものとして見てしまいます。

カポエイラも、我々が持っている格闘技や身体的な要素をもう少し「極めた」もの、システム化されたものに見えてしまうということがあって、我々にとってある種のポピュラー・カルチャーになるのです。みなさんは伝統を主張されていますが、我々はポピュラー、もう少し現代のものとして見ているように思います。

これには一つのフィルターがあると思います。先ほどのファノンの話と同じで、西洋がものをどう見ているかということとも関連します。エドワード・サイードのオリエンタリズムのような話でもあると思いますが、ある種西洋を軸に物事を見てしまう。我々はそれも一つのコンプレックスなので、ブラジルとのつながりが西洋経由でしか存在しないことになってしまっている部分があるのです。

今日はグローバル化の話も出て、宇野先生の話でもカンドンプレの話が出ました。カンドンプレの文化も武闘の文化に似ていますが、やはりもう少し「極めて」いる部分があります。

ポストコロニアルから生まれた 新しい文化としてカポエイラを捉える

資料4-1はモラングというダンスで、マダガスカルやレユニオン島などでよく見られます。その動きは

カポエイラに似ています。先ほど講演でラジャの話がありましたが、似たようなところがあって、我々にとっては逆輸入的なものがあると思います。

我々にとってダンスとはなにか、あるいは格闘技とはなにかというと、必ず三つの要素が出てきます。一つは音的な要素。必ず音があります。もう一つは、儀式、儀礼です。そして三つ目はリズム、ある種の伝統的な文化的な動きがあります。

我々が集まって格闘技やダンスをしているときには、必ず儀式の流れになるわけです。ただのエンターテインメントではありません。たとえばセネガルで行なわれている相撲も、もともとは収穫祭でしていた格闘技です。

伝統的な格闘技がスポーツ化するのはほんとうに新しい文化で、一つのポピュラー・カルチャーでもあるという意味です。カポエイラというのは、アフリカ起源の文化がアフリカに戻ってきたのではなく、いわゆるある種の *aliénation* のなかで生まれた新しいかたちです。作ったのはアフリカ出身の黒人たちかもしれませんが、その人たちが持ったものを寄せ集めて作っていると考えられます。一つのポストコロニアル現象としてのカポエイラの見方についてみなさんが触れていなかったのも、その方面でこのあと議論ができればと思っています。

専門家ではない立場で失礼なことを言ったかもしれませんが、この方面で私が直感として思うことで、もともと奴隷やアフリカから来た黒人の文化だったものについての見方をお話しさせていただきました。

